



梶井基次郎全集 第二卷

筑摩書房版

## 梶井基次郎全集第二卷

昭和四十一年五月二十五日第一刷發行  
昭和四十九年三月二十五日第十刷發行

著者 梶井基次郎

編集者 淀野隆三

中谷孝雄

發行者 井上達三

印刷者 白井倉之助

發行所 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

郵便番號 一〇一—一九一

電話東京 (二九二) 七六五一

振替東京 四一一二三

印刷株式會社 精興社  
製本株式會社 鈴木製本所

(分類) 0395 (製品) 70402 (出版社) 4604

## 目次

### 遺稿

|              |    |
|--------------|----|
| 栗鼠は籠にはいつてゐる  | 五  |
| 闇の書          | 八  |
| 夕焼雲          | 三  |
| 奇妙な手品師       | 二五 |
| 猫            | 二七 |
| 琴を持った乞食と舞踏人形 | 二〇 |
| 海            | 二四 |
| 薬            | 二九 |
| 交尾           | 三  |
| 雲            | 三五 |

藪熊亭……………三

溫泉……………四

## 批評感想

川端康成第四短篇集「心中」を

主題とせるヴァリエイション……………五

『新潮』十月新人號小說評……………六

『戰旗』『文藝戰線』七月號創作評……………七

詩集「戰爭」……………八

「親近」と「拒絶」……………九

青空同人印象記……………一〇

淺見淵君に就いて……………一一

『亞』の回想……………一二

「青空」のことなど……………一三

講演會 其他……………一四

編輯後記 ..... 叁

編輯後記 ..... 四

編輯後記 ..... 四

「青空語」に寄せて ..... 六

編輯後記 ..... 六

## 日記草稿

第一帖 ..... 大正十九年 ..... 一〇一

第二帖 ..... 大正十九年十月 ..... 一〇三

第三帖 ..... 大正二十年十二月 ..... 一〇五

第四帖 ..... 大正二十年秋 ..... 一〇七

第五帖 ..... 大正二十一年 ..... 一〇九

第六帖 ..... 大正二十二年 ..... 一一一

第七帖 ..... 大正二十三年 ..... 一一三

第八帖 ..... 大正二十四年 ..... 一一五

..... 大正十五年五月 ..... 一一七

..... 大正十五年五月 ..... 一一九

..... 大正十五年九月 ..... 一二一

|     |      |    |
|-----|------|----|
| 第九帖 | 昭和二年 | 三六 |
|-----|------|----|

|     |      |    |
|-----|------|----|
| 第十帖 | 昭和二年 | 三七 |
|-----|------|----|

|      |      |    |
|------|------|----|
| 第十一帖 | 昭和二年 | 四〇 |
|------|------|----|

|      |              |    |
|------|--------------|----|
| 第十二帖 | 昭和三年<br>昭和四年 | 四四 |
|------|--------------|----|

|      |      |    |
|------|------|----|
| 第十三帖 | 昭和六年 | 四四 |
|------|------|----|

|      |              |    |
|------|--------------|----|
| 第十四帖 | 昭和五年<br>昭和六年 | 四五 |
|------|--------------|----|

|      |      |    |
|------|------|----|
| 第十五帖 | 昭和六年 | 四六 |
|------|------|----|

|      |      |    |
|------|------|----|
| 第十六帖 | 昭和七年 | 四七 |
|------|------|----|

|      |      |    |
|------|------|----|
| 看護日誌 | 梶井ひさ | 四七 |
|------|------|----|

|     |  |    |
|-----|--|----|
| 編者註 |  | 五〇 |
|-----|--|----|

|    |  |    |
|----|--|----|
| 後記 |  | 五一 |
|----|--|----|

梶井基次郎全集

第二卷





遺

稿



## 栗鼠は籠にはいつてゐる

陽のよくあたる久し振りの朝！

人はみな職場に、子供達は學校へ、みな行つてしまつたあとの街を歩くことは、日頃怠惰な藝術家にとつてなんといふ愉快的ことだらう。うららかにひっそりしてゐる。道で會ふのは赤ん坊をおぶつたお婆さんか、自轉車に乗つた御用聞しかない。高い土塀に咲残つたばらの匂が路面まで降りて來てゐる。さ、さんかの花を散らして小鳥が逃げてゆく。

日光にはまだ生氣がある。これが晝をすこし過ぎると、なぜあんなにも物悲しくなるのか？

そんなある朝、私は「鳥源」といふ小鳥屋の店先に立つて、陽を浴びて騒いでゐる小鳥達を眺めてゐた。彼等は餌を貰つたところだつたらしい。菜つ葉を食ひ裂き、粟を蹴散らし、水をくぐみ、飲む有様はまことに異様な騒擾であつた。それが濟んでしまふと彼等はまた横棒の上へ歸つて、眼白押しに竝びながら「あたしを買つて頂戴」をやるのであらう。なんといふまい仕掛になつてゐることか。籠のなかの小鳥達！

そのうちに私は非常に興味のある一つの籠を發見した。それは黒い寶玉のやうな眼をした、褐色の背に白い縞の走つてゐる猫じやらしのやうな尻つ尾を持つた、アクロバットの一群だつた。朝鮮栗鼠!

この連中は十匹で二十四匹の錯覺を與へるために活動してゐた。餌を食ひに來てゐる奴のほかは、まるで姿がつかまらない。籠を垂直に驅けあがつてゆく。身を翻す。もう向ふ側を驅け下りてゐる。また驅けあがつてゆく。もう下りて來てゐる。また驅けあがつてゆく。もう下りて來てゐる。

アーチだ! いつも一定の、好ましい、飛躍の恰好の殘像で構成されてゐる。

餌を食つてゐる彼等はほんたうに可憐に惻巧<sup>こくこう</sup>そうに見える。猫じやらしの穂のやうに芯の通つた尻つ尾をおつたて鉢の前へ坐る。拜むやうな恰好に兩手を揃へて、穀類を掬つては食ふのである。まるで行儀のよい子が握飯を食つてゐるやうではないか? そしてまた錯覺の、群飛の、アーチのなかへ驅けあがつてゆくのである。

隣りの平たい籠のなかでは、彼等はまた車を廻さされてゐた。

彼等の一匹が車のなかへはいると、車は猛然と廻り出す。彼は驅ける驅ける。車は廻る廻る。まるで旋風機のやうに。棧もなにもかも見えなくなつてしまふ。そのなかから、彼の永久の疾驅の恰好が商標のやうに浮き出して來る。ついと彼が走りやめる。と、棧がブランプランと揺いで、一走<sup>註</sup>りをすませた彼の姿がそのなかから下りて來る。そしてまた代りの奴がはいる。そしてまた車が廻り出す。

彼等はその遊びに驚くべく熱心である。なぜだらう? これが天性といふのだらうか? それとも別の訓練がかくも彼等を「六日競争」の選手にしてしまつたのだらうか?

しかし私はさきほどの籠のアクロバット達を見較べて見ることによつて、「圓の逆は點なり」といふ難し

い數學<sup>註</sup>の定理を思ひ出しながら、それを「天性」だと歸納してしまつた。まことに圓の逆は點なのである。そのうちにまた私は驚ろき出した。その點が——靜止の位置にゐてしかも疾驅してゐる彼が、ほんたうに遠くへ遠くへ、走り去つてゆくやうに見え出したのである。五十米。百米。二百米。ああ走る走る、遠くへ遠くへ。

私は夢中になつてしまつた。此奴は恐るべき革命家だ！ 車のなかにゐながら、車から無限の遠さへ走つてゐるではないか。此奴等は物理學の法則を破壊してしまつた。ああなんといふ疾驅だらう！

私は感謝してしまつた。感謝しながら見入つてゐた。見入りながら考へはじめた。何を？ 隣の奴等を。彼等もまた恐るべき革命家ではないか！

仰向けに飛躍する身輕さは重力の法則を消去してゐる。おまけに「十は十に非ず」といふことまで主張しようとしてゐるではないか！

「恐ろしい革命家だ」

さうひとりごちながら最後に私はそこを立ち去つた。愉快的朝の散歩の思はぬ收穫に心ときめかせながら。

しかし晝が去つて、衰へた日影をはや木枯が亂しはじめる。夕方。私の考へはなにもかもが陰氣になつてしまふ。私は朝の栗鼠のことを考へ直して見る。

「革命家だなんて。たかだかが手品師かアクロバットではないか。それを革命家だなんて。栗鼠はやはり籠のなかにゐるんだぜ」

（昭和二年十月）

## 闇の書 断片

### 一

私は村の街道を若い母と歩いてゐた。この弟達の母は紫色の衣服を着てゐるので私には種々のちがつた女性に見えるのだつた。第一に彼女は私の娘であるやうな氣を起させた。それは昔彼女の父が不幸のなかでどんなに酷く彼女を窘めたか、母はよくその話をするのであるが、すると私は釋い母の姿を空想しながら涙を流し、しまひには私がその昔の彼女の父であつたかのやうな幻覺に陥つてしまふ註のが常だつたから。母はまた私に兄のやうな、ときには弟のやうな氣を起させることがあつた。そして私は母が姉であり得るやうな空間や妹であり得るやうな時間を、空を見るときや海を見るときにいつも想ひ描くのだつた。註

燕のゐなくなつた街道の家の軒には藁で編んだ唐がらしが下つてゐた。貼りかへられた白い障子に照つて

ゐる日の弱さはもう冬だつた。家竝をはづれたところで私達とはまつた。散歩する者の本能である眺望がそこに打ち展けてゐたのである。

遠い山々からわけ出て來た二つの溪が私達の眼の下で落ち合つてゐた。溪にせまつてゐる山々はもう傾いた陽の下で深い陰と日表にわかたれてしまつてゐた。日表にことさら明るんで見えるのは季節を染め出した雜木山枯茅山であつた。山のおほかたを被つてゐる杉林はむしろ日陰を誇張してゐた。蔭になつた溪に死のやうな靜寂を與へてゐた。

「まあ柿がずるぶん赤いのね」若い母が云つた。

「あの遠くの柿の木を御覽なさい。まるで柿の色をした花が咲いてゐるやうでせう」私が云つた。

「さうね」

「僕はいつでもあれ位の遠さにあるやつを花だと思つて見るのです。その方がずっと美しく見えるでせう。すると木蓮によく似た架空的な匂までわかるやうな氣がするんです」

「あなたはいつでもさうね。わたしは柿はやつぱり柿の方がいいわ。食べられるんですもの」と云つて母は媚かしく笑つた。

「ところがあれやみんな澁柿だ。みな干柿にするんですよ」と私も笑つた。

柿の傍には青々とした柚の木がもう黄色い實をのぞかせてゐた。それは日に熟んだ柿に比べて、眼覺めるやうな冷たさで私の眼を射るのだつた。そのあたりはすこしばかりの平地で稻の刈り乾されてある山田。それに續いた桑畑が、晩秋蠶もすんでしまつたいま、もう霜に打たれるばかりの葉を残して八日に照らされてゐた。V雜木と枯茅でおほはれた八大きなV山腹がその桑畑へ傾斜して來てゐた。山裾に沿つて細い路がつ



いてゐた。その路はしばらくすると暗い杉林のなかへは入つてゆくのだつたが、打ち展けた平地と八大らかにV明るい傾斜に沿つてゐるあひだ、それはいかにも空想の豊かな路に見えるのだつた。

「ちよつとあすこを御覽なさい」私は若い母に指して見せた。背負ひ杵を背負つた村の娘が杉林から出て來てその路にさしかつたのである。

「いまあの路へ人が出て來たでせう。あれは誰だか「知つてゐますか。」わかりますか。昨夜湯へ來てゐた娘ですよ」

私は若い母が感興を動かすかどうかを見やうとした。しかしその美しい眼はなんの輝きもあらはさなかつた。

「僕は此處へ來るといつ「で」もあの路を眺めることにしてゐるんです。あすこを人が通つてゆくのを見てゐるのです。僕はあの路を不思議な路だと思「つてゐます。遠くの人を望遠鏡で見たときのやうに」ふんです」

「どんな風に不思議なの」

母は八稍とVたたみかけるやうな私の語調に困つたやうな眼をした。

「どんな風につて、さうだな、譬へば遠くの人を望遠鏡で見るでせう。すると遠くで「見え」わからなかつたその人の身體つきや表情が見えて、その人がいまだんなことを考<sup>註</sup>へてゐるかどんな感情に支配されてゐるかといふやうなことまで八がV眼鏡のなかへは入つて來るでせう。恰度それと同じなんです。「人があの路へさしかかると私は」あの路を通つてゐる人を見ると八ついV私はそんなことを考へるんです。あれは通る人の運命を曝露して見せる路だ」